



モニール・ラヴァ
ーニール (Moniru
Ravānpūr, 一九五二年
ー) は、イラン現代文
学を牽引する女性作家
のひとりである。ペル

シア湾岸のプーシエフル州ジョフレ村出身の彼女は、海辺を舞台とした作品が特徴的で、現地の人々の風俗慣習をふんだんに反映させたものが多い。そのような作品の中では超自然的存在が登場し、マジックリアリズムの手法が駆使されることで知られる。

彼女は一九七九年のイスラーム革命後に行った政治活動により、家族・親族ともに弾圧を受け、逮捕・拘留も経験したことから本格的な執筆活動を決意する。しかし、当時は無名であり、イラン・イラク戦争下という状況も相まって八年もの間出版に至らなかったことから、「本を持たない作家」と紹介されることもあった。

一九八八年に『キャニーズー (Kanzā)』を上

梓すると次々と作品を発表し、二〇〇三年に短編小説『ラナー (Rānā)』でフーシャング・ゴルシーリー文学賞を受賞。政治的弾圧により二〇〇六年にアメリカへ亡命し、現在も活発に執筆活動が続けている。亡命した年にはイラン国内の書店から彼女の著作は次々と姿を消し、イランでの出版は事実上不可能となった。近年ではeブックのオンライン販売を基盤に、ペルシア語のみならず英語でも創作活動が続いている。彼女の作品のうち、短編作品がひとつ邦訳されている。『キャニーズー』に収録された作品で、湾岸を舞台とし児童婚をテーマに描いた『長い夜 (Shab-e boland)』(藤元優子訳『天空の家ーイラン女性作家作品集ー』段々社(二〇一四年))である。また、論考と解説として、代表作のひとつを扱った「M・ラヴァーニール著『溺れし者』解題」(藤元優子著『イラン研究』第一四号、二〇一八年)がある。

彼女の作品は、故郷の海のイメージを反映したものの傍ら、自身の政治的経験を反映した作品も複数あり、本作品はそのうちのひとつと見做すことができよう。本作品ではマジックリアリズムの手法が用いられているわけではないものの、夢か現か判別できない意識の流れの中で物語が進んでいる。物語をより難解にしている要因として、ペルシア語の文法の特徴を駆使していることも挙げられる。ペルシア語では、三

人称で書かれる文章の性別はわからないため、主人公トフィーが登場するまで主人公が「彼」であるのか「彼女」であるのかすらわからないのである。物語全体が謎に包まれているが、以下でこの作品を紐解いていきたい。

主人公は物語の冒頭から一貫して窓の外の猫を恐れている。しかも、その猫はただの猫ではなく、彼の頭の中を隅々まで読み取れるという。この窓の外にいるはずの猫はその後、モアツザムという人物と混同されていることから、この猫を含め脅威として描かれている窓の外の存在は幻覚によるものであると考えられる。空っぽのはずの本棚に本があるのではないかと恐れた主人公が直接本棚を触って確認する、という場面も幻覚からくるものである。また、作中では時制が入り乱れているため、これも主人公の混乱を反映しているといえる。

主人公は一体何を恐れているのだろうか？ その昔、窓を開放して電気もつけて暮らしていた主人公は、今は煙草の火にさえ注意を払うようになっている。更には、窓の外から誰かに踊っている様子を見られて「踊らないでください」と言われることを恐れている。これは明らかに現体制批判をしていると見做して良いであろう。イランでは七九年のイスラーム革命以降、特に女性が公的な場で踊ることは禁止されている。現実的に考えれば、ひとり暮らしの男性で

ある主人公が家の中で踊ったところで、特に問題にはなり得ないはずである。しかし、全てを統制下に置こうとする体制側ならばそれすらしかねないことを描いていると捉えられる。

次に、主人公が本を全て焼き払い、本棚さえも家に置きたくないと思っていること、本棚に何があつたかを問われ、率直に答えず言い訳をしていることに注目したい。ここで本を持っていた主人公は知識人を象徴しており、彼は体制側が好ましく思わないような書籍を所持、あるいは執筆していたことを示していると考えられる。窓の外から問うてくるモアツザムという人物名には、「偉大な」という意味があり、役人などの権力を持った人物を暗示している。さらに警官の存在や、主人公が大通りでポケットの中身を見せて潔白を示そうとすること、知人は密告される可能性があると思ひ、見知らぬ人にドアを換えてもらうことを勧めていることなど、体制側による監視の目を思わせる表現は随所に登場する。このような描写から、検閲や思想の統制といったテーマが現れているといえる。

加えて、主人公は他人に気付かれないように本棚を処分しようと大工に持ち込むことも考えるが、本棚が説教用の机と椅子になることを恐れている。このことから、主人公が宗教的権力者に嫌悪感を抱いていることも暗示されている。

その後登場するマシユガーセムという人物について、主人公との関係ははっきりとはわからない。マシユガーセムの名前を考慮すると、「マシユ」はイランのメッカとも呼ばれる宗教都市マシユハドを参詣した人に付けられる宗教的な称号である。メッカを訪れた人がハッジになると同様である。また、マシユガーセムという名前は、イーラジ・ペゼシユクザードによる著名な小説『私のおじさんナポレオン』（一九七〇年）に登場する忠実な召使いと一致するため、主人公の家族の召使であつたことが暗示されていると考えられる。しかし、この作品では主人公が金に困っている様子が描かれているのに対し、本作品ではマシユガーセムが「金なら私が」と述べているため、立場が逆転している（その後の「あなたお金はないでしょう？」というのには、主人公がそれを受け入れていない様子である）と捉えることができる。七九年の革命後には物事の価値観が一八〇度覆り、改革的な思想の人は職や地位を失った一方、宗教的な人が地位を手に入れる傾向があつたため、そうした状況を反映しているといえる。

マシユガーセムと家の扉や窓の会話をした後、主人公は最終的に窓を塗り固めてしまう。それにもかかわらず、どこからか猫が自分の体に侵入していることに気づく。彼はその猫を殺すために、猫の声が消えるまで食事を摂らない

という選択をする。ようやく猫はいなくなつて、彼は死体を外に出して埋める。そして一二一枚のナンを頼んで食べる……。物語の中の猫を体制側の脅威として捉えらると、この結末は、主人公の思想がやがて侵食されることを示しているといえることができるかもしれない。

そして、ここで突飛に登場する「一二一枚のナン」というのは、この作品が書かれた一九九七年にイランで起きたある出来事に注目すると、糸口が掴める。この年に、保守派のラフサンジャーニー元大統領（任期一九八九―一九七七年）体制下で一二一人の人々が処刑されている。これを裁いたのは、当時の軍事革命法廷長官モハンマド・レイシャフリー（一九四六―）で、軍事革命法廷は主に政治犯を処刑する機関である。これらを考慮すると、ひとりの知識人が思想統制の憂き目に遭い、一二一人の同志の死を目の当たりにし、身を守るべく一旦体制側の思想を受け入れる、という構造が浮かび上がる。しかし、主人公は体内に入ってきた猫が死ぬのを待ち、その死体を外に出して埋めていることから、弾圧の熱りが覚めた後にはその思想を拒否することが暗示されているといえる。そして、一二一枚のナンを食べるといふ行為は、一二一人の同志の遺志を受け継ぐという主人公の決意が表れているのではないだろうか。